

## 「東アジア的同時性」の視座：1930年代モダニズム 文学・文化に関する研究ノート

波瀲, 剛  
九州大学大学院比較社会文化研究院：准教授

<https://doi.org/10.15017/1525856>

---

出版情報：九大日文. 24, pp.33-48, 2014-10-01. 九州大学日本語文学会  
バージョン：  
権利関係：



# 「東アジアの同時性」の視座

— 1930年代モダニズム文学・文化に関する研究ノート —

波瀲 Wakurō  
剛 Tsuyoshi

## 1. はじめに

モダニズムの「世界的同時性」はすでに言い古された観のあ  
る、いわば常識である。私自身がモダニズムについて興味を抱  
き研究書や論文を参照していた一九八〇、九〇年代でも、アメ  
リカやヨーロッパの最新文化が映画や雑誌、書物、あるいは百  
貨店等に並ぶ商品を通して紹介され、ライフスタイルが「洋式」  
に変わってゆく、「日本」と「欧米」との同時性が記述されて  
いた。もちろん私もそうした図式を受け入れて研究に取り組ん  
でいたのだが、月日が経過するにつれ、モダニズムの世界的同  
時性というときの「世界」とは何を指すのかという疑問が生じ  
るようになった。端的に言えば、「世界的同時性」ならぬ、「東  
アジアの同時性」という枠組みでモダニズムについて考えるこ  
とは可能なのかという疑問である。

この疑問については、『越境のアヴァンギャルド』(NTT出版、  
二〇〇五年)以降、私自身継続して取り組んでいるし、ポストコ  
ロニアル理論の導入とともに、さまざまな研究が日本の人文科  
学研究全般で展開されている。なので、いまさら熱く語り出し

てどうなるのかという気もする。だが、二〇一一年九月から一  
年間韓国に滞在する機会を得て、韓国国内におけるモダニズム  
研究の状況を把握するにつれ、歴史的現象としての「同時性」  
ばかりでなく、研究者間における関心の共有という意味で、現  
在の東アジアにおける研究の「同時性」について考えてみる必  
要や可能性があると感じた。本稿はこうした点をふまえて、い  
くつかの事例紹介を行い、今後の研究議題についての指摘を試  
みたいと思う。

本格的に議論を始める前に一例を挙げるならば、以下の川端  
康成と金起林のケースが良いかも知れない。

川端康成『浅草紅団』は、一九二九年一月から一九三〇年  
二月まで『東京朝日新聞』に連載された後、『新潮』、『改造』  
にも一部掲載され、一九三〇年一月に先進社から刊行された。  
「エロチシズムと、ナンセンスと、スピイドと、時事漫画風な  
ユウモアと、ジャズ・ソングと、女の足と——」(四一頁)「モ  
ダン」そして、「エロ・グロ・ナンセンス」が流行語となった  
まさにこの年に、モダン文化特有の軽妙さが、浅草をめぐる人  
物を通して描かれている。まさに同じ時期、韓国、当時の「朝  
鮮」においても次のようなモダン文化に関する言及が見られる。

私たちは新聞を通じてのみ急激なスピード、末梢神経、色  
彩、イルミネーション、マネキン、ストリートガール、モ  
ボの幅広のズボン、モガの肉感的な足、ジャズ、レビュー、  
これらが交錯する濁流に、極めて鮮明な現代生活の雰囲気

に参加できる。

(金起林「新聞記者としての最初の印象」『鉄筆』一九三〇年七月、青柳優子編訳者『朝鮮文学の知性 金起林』新幹社、二〇〇九年、八八頁)

この文章において、川端康成と同様、「スビード」や「モボ」「モガ」「ジャズ」「レヴュー」に対する関心がみられるのは、ある意味では当然ともいえる。なぜならこの文章を執筆した金起林は一九三〇年に東京からソウル、当時の京城に戻ってきたばかりだった。東京におけるモダンの空気を十分に味わって、そこでの経験を踏まえながら朝鮮日報社の文芸記者としての生活が始まったばかりであり、川端康成と同じような視線でモダンの都市文化を描くことは不自然な話ではない。

金起林は「朝鮮」におけるモダニストの一人であり、一九三三年に結成された「九人会」の一員である。入れ替わりもあって総勢一三人がその名を連ねたモダニスト集団のなかで(李孝石、李鐘鳴、金幽影、柳到真、趙容萬、李泰俊、鄭芝溶、李無影、朴泰遠、李箱、朴八陽、金裕貞、金煥泰)、金起林(一九二五—一九二九、名教中・日本大学、後に再度渡日一九三六—一九三九 東北帝国大学英文科)、鄭芝溶(一九三一—一九二九、同志社大学予科・英文科)、朴泰遠(一九二九—一九三二、法政大学予科・本科)の三人は「内地」留学組であった<sup>①</sup>。このような点を確認するとき、昭和初期のモダン文化は日本ばかりでなく、「朝鮮」の文学者にとつてどのような意味を持ち得たのかについて考察する重要性が認識される。帝都の華や

かな文化を東京で体験する者、あるいは帝国の文化圏であった京城で体験する者。高級文化としてのモダニズムから、風俗文化のエロ・グロ・ナンセンスに至るまで、各々の文学者はどのように接したのか。従来の各国文学的枠組みにとらわれることなく、横断的な文学史の記述を試みることに意義があるといえるだろう。

## 2. 同時代文化としての昭和モダン——「朝鮮」における受容の様相——

「モダニズム」は、ふつう一八九〇年から一九四五年の間に支配的となり、特に一九二〇年代から一九三〇年代にもっとも生産的で革新的な時期を経験した芸術や文学上の運動として定義されている(『コロンビア大学現代文学・文化批評用語辞典』松柏社、一九九八年、二七二頁)。日本の場合には、「モダンガール」という用語から一般化するようになり、北沢秀一「モダン・ガール」(『女性』一九二四年八月)を契機に「モダン」が新たな文化現象を指すようになった。一九二〇年代の後半から一九三〇年前後にかけては、「近代生活座談会」(『文芸春秋』一九二八年一月)、「モダン生活漫談会」(『新潮』一九二八年一月)といった座談会や、内田魯庵「モダンを語る」(『中央公論』一九二八年一月)、大宅壮一「モダン層とモダン相」(『中央公論』一九二九年二月)、瀬沼茂樹「モダニズムと其の諸相」(『一橋文芸』一九二九年五月)、特集「モダン・日本の近景」(『中央公論』一九二九年一〇月)、平林初

之輔「昭和四年の文壇の概観 八、モダンニズム全盛」(『新潮』一九二九年二月)、アンケート「I・謳歌すべきモダン諸相、2・排撃すべきモダン諸相」(『モダン日本』一九三〇年一月)、龍胆寺雄「モダンニズム文学論」(『新文学研究第二編』一九三一年六月)といった評論や特集記事が目につく。

当植民地統治下の「朝鮮」において、こうして取りざたされていた「昭和モダン」の文化は、「内地」ばかりではなく、朝鮮総督府や京城帝国大学のネットワークを通して受容可能だった。たとえば、李箱は「朝鮮語」の小説「二月二日」(『朝鮮』一九三〇年二月〜二月)で創作活動を開始したといわれているが、その後の『朝鮮と建築』誌における日本語詩の発表や表紙凶案掲載(一九三〇年一月〜二月)にあたっては、一九二九年に朝鮮総督府内務局建築課、そして会計課で勤務したことが重要な契機となっている。朝鮮建築学会の機関誌に創作の場を求めるような姿は、発表媒体の限られていた当時の京城では珍しいものではなかったが、李箱からすれば二重言語創作の場として機能した。しばしば指摘される日本のモダンニズム文学からの影響も、こうした職場環境とそこで働く日本人との関係が作用した可能性は十分に考えられる。すなわち、いまと違っては日本、韓国の文学史から顧みられることのない人々が重要な役割を果たした可能性がある。

また、李孝石や趙容萬の場合も彼らが京城帝国大学に在籍し、そこで日本語・「朝鮮語」双方の文芸誌に執筆し、やはり二重言語創作を行っていた点はあらためて考慮されてよいだろう。

「손・미령돈・윙그의劇研究」ジョン・ミリントン・シングの劇研究」(『大衆公論』一九三〇年三月抄録)を京城帝国大学の卒業論文として提出した李孝石も、「何だと? 都会に? / 馬鹿は言はないで呉れ / 都会に帰らうなんて / あの科学くさい句を又嗅がせようといふのか」(李孝石「冬の森」『清涼』三号、京城帝国大学予科学友会、一九二六年三月、一六六頁)と、予科時代から日本語で創作を行い、後のモダンニズム文学の展開を感じさせる文章を残している、趙容萬にも、「開け放たれたアパートメントの窓から漏れる華やかな光に照らされながら、傍目も振らず大股に歩く、造り立てのモダン・ボーイは今夜の楽しみに急ぐのだらう。五月は恋のシムボルである。」(趙容萬「[NEB VEB]『清涼』六号、一九二八年一月、『近代朝鮮文学日本語作品集 創作篇2』緑蔭書房、二〇〇四年、二六一頁)といった表現で始まる小説がみられる。

韓国の人文・社会科学分野においては、二〇〇〇年代に入り一九二〇〜一九三〇年代の植民地都市ソウルのモダン文化に対する関心が急速に高まっている。その一端は金振松「ソウルにダンスホールを」(川村湊監訳、法政大学出版社、二〇〇五年、原著一九九九年)、申明直「幻想と絶望」(岸井紀子・古田富建訳、東洋経済社、二〇〇五年、原著二〇〇三年)でも知ることができる。とはいえ韓国国内で発表される論文と研究書はかなりの量に及び、社会学、歴史学を中心にして、モダンガール、カフェ、遊興施設、交通、通信、百貨店、博覧会、建築、広告、ファッション、風刺漫画、音楽、映画、演劇、教育、スポーツ、読書習慣、総合雑誌、検閲等々と、当時の日常文化・大衆文化・風俗文化の様

子が一次資料の提示とともに明らかに becoming (参考編 一)。

近年の韓国におけるモダン文化研究が明らかに becoming しているのは、消費文化、大衆文化、風俗文化としてのモダンが一九三〇年代のソウル(京城)で最盛期を迎え、昭和モダンの代名詞である「エロ・グロ・ナンセンス」も新聞、雑誌で紹介されるようになった点である。実際当時の新聞や雑誌を調べていくと、『朝鮮日報』では、「尖端的流行語」(에로(エロ))一九三二年一月二日、「ユロ(グロ)・넌센스(ナンセンス)」一月四日、『東亜日報』では「新語解説」(「ユ로(グロ)」一九三二年二月九日、「에로(エロ)」三月二十六日、「넌센스(ナンセンス)」四月六日)、雑誌『新東亜』では「모던語点考(モダン語点考)」(에로(エロ))一九三二年二月号、「넌센스(ナンセンス)」四月号、「그로테스크(グロテスク)」三三年一月号」と用語における同時性を確認することができる。

もちろん用語ばかりでなく、風俗現象としても流入し、『別乾坤』などで「内地」同様の「エロ・グロ」記事が散見されるようになる。まさにその時期、金東仁が小説「狂炎산마타(狂炎ソナタ)」(『中外新聞』一九三〇年一月)を連載する。「この作品は屍姦や屍好サディズムなどの衝動的な題材を扱い、芸術のためなら殺人も許されるといふ極端な芸術至上主義を標榜して注目を集めた。こうした特異な性的な症例を、金東仁は、当時日本で出版されていた『変態性欲心理』という本から取ったようである。」(波田野節子訳『朝鮮近代文学選集』5 金東仁作品集 平凡社、二〇一二年、四二〇頁)とあるように、文化の同時性という点では

「変態心理」「変態性欲」についても注目されていたと考えられる。さらには、同時代の現象を「科学」的に把握しようとする動きには雑誌『怪奇』の例もみられ、表紙では次のように標榜している。

「朝鮮을中心으로 하는 (朝鮮を中心とする)」(引用者注) /  
哲学 宗教学 神話学 / 神学 心理学 倫理学 / 心靈学  
医学 性慾学 / 天文学 地理学 生物学 / 人類学 民俗学  
言語学 / 社会学 経済学 考古学 / 史学 年代学 泉貨学 / 文字学 図書学 / 金石学 / 文学 美術 音楽 / 第  
一切文化科学의 通俗趣味雑誌」  
(崔南善編集『怪奇』一号、一九二九年五月、弘文社、内表紙)

このようにして、現象の次元においても「内地」と同様、猟奇的な事件を指す場合や、「グロテスク」なものとして受け入れられるものが巷を賑わし、それらの現象を科学的、擬似科学的に解明しようとする動きがあった。さまざまなレベルにおいて「昭和モダン」の文化が同時代的に受容されていたのである。<sup>5)</sup>

### 3. 帝国主義とモダンの文化力学

「昭和モダン」について「内地」と「外地」の同時性に注目するとき、そこから新たな発見も少なからずある一方で、無論モダニズム、モダン文化の受容に関する差異も生じている。そ

の一例としてスポーツと文学との関係についてみていきたい。

日本では一九三〇年を境に「スポーツ小説」というサブジャンルが定着した。阿部知二が「日独対抗競技」という短篇小説を雑誌『新潮』に発表し、その後次々とスポーツを題材とした小説を手がけ注目を集め、ベルリン・オリンピックが開催された一九三六年にはスポーツ誌『アサヒ・スポーツ』に「スポーツ小説」欄が設置されたりもしている。当時のスポーツ大会について振り返るならば、一九二八年に大連競技場で日本とフランスの国際対抗陸上競技大会が開催され、日本初の国際スポーツ大会が実現している。この大会を成功させた岡部平太が、翌年の一九二九年に日独対抗陸上競技を開催し、この大会が阿部の小説「日独対抗競技」の素材となった。つまり、日本においてスポーツが国際的舞臺に登場する段階に至り文学における新たな題材を提供していたのである。<sup>9)</sup>

欧米発信のモダン文化を伝播・受容するにあたって世界的同時性が認められるとしても、「朝鮮」において、日本と同様の国際試合やスポーツの消費が行われたとは言いがたく、文学においても素材としての温度差が生じている。一九二〇年代半ばには龍山にスケートリンクが開設されたソウルにおいて、スポーツの担い手であった学生がスケートを題材とした俳句を詠むような例はみつかる。

スケートや月明らけき氷上に

スケートや強か転び立ち上がり

名嘉真清城

スケートのよく走れるを眺めけり

スケートや四温日和の昼の月

スケートや両手広げて鳶の如

(ケヤキ同人集『清涼』三号、京城帝国大学予科学友会、一九二六年

三月、一九九二〇〇頁)

しかしながら、「朝鮮」では小説の題材としてスポーツが中心となっている例はほとんど見当たらない。韓国での滞在期間中には「観衆は半分も整頓してゐた。朝日に照る広々としたグラウンドの真中に船員の様な白服の役員が動いてゐた。／＼直線に走つてゐる幾筋もの白線がスポーツマンの健康な肉体の躍動を待つてゐた。」(李皓根「不安なくなる」『清涼』九号、一九三〇年七月、『近代朝鮮文学日本語作品集 創作篇2』緑蔭書房、二〇〇四年、四三七頁)といった記述を見つけただけで、この場合も具体的にスポーツ競技の場面が描かれることはない。その後、一九三七年には長編小説で卓球と乗馬が恋愛関係を示すうえで重要な位置を占める作品があることを知ったが<sup>10)</sup>、やはり稀な存在だといえる。これはサブジャンルとして「スポーツ小説」が定着した日本の場合とは顕著な差が認められる。(小説以外では、先ほどの俳句の例のほかに、沈薫「野球『朝鮮日報』一九二九年六月一三日、片石村(金起林)「스케이트(スケートイング)」『新東亜』一九三四年三月といった詩が把握できた程度である<sup>11)</sup>。

では、当時「朝鮮」においてスポーツがどのようなものとして考えられていたのか。李光洙は一九三一年に「運動の歌」を

発表しているが(春園「운동의 노래」『東亜日報』一九三一年二月一日)、すでに「民族改造論」(一九三二年)において「運動」の重要性について言及している。この点は「娯楽」や「消費」の対象ではなく、「民族」の「改良」に必要な手段として「スポーツ」が想定されていたことを端的に示している。また、スポーツ史研究においては、学校教育における体育の目的が「競技」というよりは労働力の担い手を育成するためだったという指摘もある。他方で、一九三〇年代に入ると女学校において体操、テニス、そのほかの球技が普及したという指摘もある。日本における「スポーツ文学」との違い、さらにはモダンニズム文学の違いについてさらに探ってみる意義はあるだろう<sup>9)</sup>。

また、日本ではさほど定着せずに終わったのとは対照的に、「朝鮮」において交流したジャンルとして「映画小説」を挙げることができる。これは映画の上映をめぐる「内地」と「外地」の格差がもたらした副産物だといえるが、「朝鮮」においては映画の内容を活字で伝えるという方法が発達したという<sup>10)</sup>。さらには、冒頭の例に戻るならば、「二度七年にわたって留学して日本語も達者でありながら、日本滞在時のことはまったくといっていいほど書き残さず、「作品目録」には日本語で書かれたものがない」(青柳優子『朝鮮文学の知性 金起林』前掲書、二四〇頁)金起林と、一九三〇年代半ばには崔承喜の後援者となり「朝鮮ブーム」の火付け役のひとりともなった川端康成との、両者におけるモダンニズム観の違いは、類似性よりも重要な問題となり得る。今後、こうした点を掘り下げてゆくことが新たな課題と

なってくる。

#### 4. 日韓モダンニズム文学研究の可能性

前節まででは、韓国の研究動向をふまえながら、日本と「朝鮮」における一九三〇年前後のモダンニズムに関する同時性や差異について確認してきたが、各国文学史にとらわれずに、海峽をまたいだ地域として東アジアをとらえた場合、モダンニズム文学についてどのように議論していくことが可能なのか考えてみたい。

あらためて「東アジア的同时性」という視座から検討してゆこうとするならば、この時代に日本から朝鮮半島へと文学者が訪問、滞在していた点をおさえてゆくことが重要になるだろう。これはすでにみてきたように、総督府や帝国大学の日本人ネットワークの問題ともかかわるが、たとえば、菊池寛が一九三〇年九月にソウルを訪問しているような事例、文学史上はそれほど注目されてこなかった点への注目を意味する。飛行機で満洲への途上に一日だけ立ち寄ったにしても、横光利一、池谷信三郎など蒼々たるメンバーが揃ってモダンニストたちが直接姿を現し、また彼らが集団で「外地」を体験したという事実は考慮すべきであろう。この出来事は、雑誌『モダン日本』が創刊された後、馬海松が編集に起用されていく経緯などにもつながる問題である<sup>10)</sup>。

また、詩人内野健児の例を挙げてもよいだろう。彼は一九二

三年に大田で最初の日本語詩集を刊行した後、京城へ移り、京城帝国大学英文文学科教授であった佐藤清とも交友があった。しかし『亜細亜詩脈』に掲載された弟の詩によって発禁、職も解かれ、東京へと居を移した一九三〇年に詩集『カチ』を刊行している。そのなかに次のような詩がある。

温突よ 土墻よ パカチよ 水甕よ／みんな別れたよ 白  
衣の人々

李君 金君 朴君 朱君／名もない街頭の戦士・乞食君  
苦役の浮草・自由労働者担軍／さよなら さよなら／さよ  
なら 貧しい俺のお友達

(内野健児「朝鮮よ」「カチ」特製本、宣言社、一九三〇年四月、大江  
満雄・小田切秀雄監修『新井徹の全仕事』創樹社、一九八三年、八七  
頁)

「李君 金君 朴君 朱君」との呼びかけは、前年一九二九年に発表された中野重治の詩「雨の品川駅」を彷彿とさせる。また、プロレタリア文学としての性格もこの詩集に認められる一方で、同じ詩集には次のような詩も収録されている。

ここかふえ・ふじの初夏の夜は  
まだふけやらねど、既に歓楽は幕を開けた！  
からやかな舞踏曲は蓄音器から流れ  
花下をりずみかるに踊る紅毛の男女一組

彼女の卓子により碧眼の視線を投げる婦人も同じ連であらう

(内野健児「大連の夜」「カチ」前掲書、一一一頁)

引用した詩は内野が教員として一九二四年に修学旅行の引率をした大連について詠んだものである。大連について詠む姿勢は日本人にとつて欧米の雰囲気を受容できるというエキゾティシズムの域を出るものではなく、二つの詩には大きな差があるようにもみえる。ただし、プロレタリア文学とモダニズム文学とが、ともに「新興」の文学、「尖端」「前衛」の文学として受け止められていた当時の状況においては、両者の混在が稀有なものだったとは言いがたい。むしろ、内野が大連を眼差すエキゾティックな視線を、内野の「朝鮮」を題材とする詩を読む日本人に認めることができるだろう。詩誌『亞』が一九二四年一月に創刊され、内野がのちに北川冬彦とも交流することを考慮するとき、東京、ソウル、大連と越境して、プロレタリア文学／モダニズム文学の接点が見いだされることは非常に興味深い。

こうした例のほかに、人の移動がテクストの移動へとつながるケースもある<sup>6)</sup>。昭和初期の流行作家であった谷譲次は一九二八年にシベリア経由でヨーロッパに向かう旅の途上、ハルピンを訪れている。その様子を「ハルピン―不思議が不思議でない町。／OH・YESHARBIN。いろんな別称で呼ばれるわけだ。／あらゆる人種と美しい罪の市場。／海のない「上海」。

さうして、極東の巴里。」(谷讓次「踊る地平線」『中央公論』一九二八年一〇月、二〇七頁)と記す一方で、「一種物語的なひびきを持つ都會の名は、私たち日本人にたたちに公爵伊藤の死を連想させる」(二〇五頁)、「殺した人殺された人も、もうすつかり話がついて、何処かしづかなところであうして私達のやうにお茶を喫んでいる」(二〇七頁)と綴っている。

その彼が三年後に戯曲「安重根―十四の場面」(『中央公論』一九三二年四月)を発表し、メランコリーに陥った安重根の姿を描いているのだが、この戯曲をもとにして『哈爾濱駅頭の銃声』という「朝鮮語」の戯曲が京城の三中堂書店から刊行されている。作者は李泰浩となっていて偽名という説もあるが、三中堂書店があつた仁寺洞の古書店街に名を連ねる杏林書林の経営者がやはり李泰浩と同名であり、たんなる偶然とは言い難い。いずれにせよ、伊藤博文を暗殺した安重根に関する戯曲がこの時期に朝鮮半島において刊行され、谷讓次経由でハルビン、京城が接続され、日本、満洲、朝鮮をめぐりながら、テクストが翻案されてゆく事例も存在する。

日韓のモダニズムを比較するうえで、中国(ハルビン、上海)という場をめぐる表象の差異について検討することは興味深い課題となり得る。同様にして、第三項を軸に比較検討を行う場合、ふたたび欧米からの影響をどのように受けたのかという点に問題は回帰してくるだろう。これは大衆文化のレベルにとどまらず、モダニズム文学の理論的側面においてもあてはまり、日本、そして「朝鮮」において、「英文学」がどのように展開

したのかという問題の考察へとつながる。京城帝国大学予科の同人誌についてはすでに言及したが、京城帝国大学英文学会が発行していた機関誌『京城帝大英文学会会報』(参考編二)なども、「朝鮮」におけるモダニズムの展開を考察するうえで重要な資料だと考えられる<sup>1)</sup>。

このように、日韓のモダニズムに関する研究にはさまざまな次元で追及すべき課題があるし、また、「東アジアの同時性」について考える意義があると考える。今後、個人としても、共同研究というレベルでも、モダニズムの「東アジアの同時性」という視座において地道に調査に取り組んでみたいし、議論の場が広まってゆくことを期待している。

#### 【注記】

1 日本語で読める文献としては、朴泰遠著・牧瀬暁子訳『川辺の風景』(作品社、二〇〇五年) 崔真碩訳『李箱作品集』(作品社、二〇〇六年)、山田佳子訳『小説家仇甫氏の日』『朝鮮近代文学選集』(平凡社、二〇〇六年)、吉川風『朝鮮最初のモダニスト 鄭芝溶(新・現代詩人論叢書)』(土曜美術社出版販売、二〇〇七年) などがある。

2 植民地朝鮮における二重言語創作に関する日本側の研究としては、佐野正人氏の論考、「京城帝大英文科ネットワークをめぐる―植民地期韓国文学における「英文学」と二重言語創作」(『国際文化研究科論集』一六号、二〇〇八年)、「李箱の詩、李箱の日本語―メディアとしてのノミギだしにされた日本語」(『アジア遊学』一六七号、二〇一三年八月)などを参照されたい。

3 直近では、尹大石「京城帝国大学の学生文芸と在朝日本文学」（『跨境日本語文学研究』vol.1、二〇一四年六月、二四九〜二六〇頁）の論考がある。

4 김지영 「『기괴』에서 『괴기』로, 식민지 대중문화와 환멸의 모더니티」『개념과 소통』 5号、2010.6.（キム・ジヨン『奇怪』から「怪奇」へ 植民地大衆文化と幻滅のモダニティ）『概念と疎通』五号、二〇一〇年六月）を参照。また、「朝鮮」においても「エロ・グロ」『猟奇趣味』の流行が探偵小説との接点をもつていた点は、オ・ヘジン『1930年代韓国推理小説研究』（語文学社、二〇〇九年）といった著書をはじめ、韓国研究者の間でも関心が高まっている。そのさなか、イ・ヒョンジン、金津日出美『京城の日本語探偵作品集』（学古房、二〇一四年）が刊行された。また、「朝鮮」における「エロ・グロ・ナンセンス」全般に関する研究も進んでいて、ソ・レソプ『エロ・グロ・ナンセンス』（サルム、二〇〇五年）の著書や、채석진「제국의 감각 에로 그로 년센스」『페미니즘 연구』제5호、2005.10.（チェ・ソクジン「帝国の感覚 エロ・グロ・ナンセンス」『フェミニズム研究』第五号、二〇〇五年一〇月）をはじめ、「エロ」「グロ」「ナンセンス」のそれぞれについても論文がさかんに執筆されるようになっていく。

5 波瀾『雑誌「アサヒ・スポーツの小説欄」(上) (下)』《九大日文》一一・一二号、二〇〇八年三月・一〇月、「未知ノ既知のアフリカ」新興芸術派と阿部知二（『文学研究論集』二七号、二〇〇九年三月）や、疋田雅昭・日高佳紀・日比嘉高編著『スポーツする文学—一九二〇—三〇年代の文化詩学』（書写社、二〇〇九年）を参照。

6 박선희 『절리꽃』에 나타난 스포츠와 연애』『우리말연구』59、2013.12.

（パク・ソニ『のばらの花』にみるスポーツと恋愛）『ウリマルグル』五九号、二〇一三年一二月）を参照。

7 詩「スケートティング」については、김예리《이미지의 정치학과 모더니즘 김기림의 예술론》소명출판、2013.（キム・イェリ『イメージの政治学とモダニズム 金起林の芸術論』ソミョン出版、二〇一三年）において、水上で直線、曲線が交錯し、緩急をつけて描き出されるスケートの動きが、秩序正しく進む時計に代表される「現実」の「速度」を解体していくとの分析がなされている（八七頁）。

8 西尾達雄『日本植民地下朝鮮における学校体育政策』（明石書店、二〇〇三年）、同「植民地スポーツ史研究で今求められている課題とは—「植民地近代化論」との関わりで」（『植民地教育史研究年』八、二〇〇六年）、김정일『1930년대 신여성 의 신체와 근대성』『정신문화연구』2001. 가을호（キム・キョンイル「一九二〇—一九三〇年代新女性の身体と近代性」『精神文化研究』二〇〇一年秋号）などを参照した。

9 今年に入って、チョン・ウヒョン「植民地朝鮮の映画小説」（ソミョン出版、二〇一四年）が刊行されている。

10 川村湊「馬海松と『モダン日本』」（池田浩士編『文学史を読みかえる2「大衆」の登場』インパクト出版会、一九九八年）などを参照。

11 以下の各議次をめぐる例については、波瀾『記憶／歴史／翻訳—ハルビンをめぐる物語—（西原和海・川俣優編著『満洲国の文化—中国東北のひとりの時代』せらび書房、二〇〇五年）で論じたことがある。なお、その際は、「杏林書院」の「李泰浩」については存在を知らなかった。沖田信悦『植民地時代の古本屋たち』（寿郎社、二〇〇七年）で作成された京城市府の古書店一覧（六九頁）を通して知った事実を元に推測した。

学——」(筑波大学文化批評研究会編『翻訳』の圏域——文化・植民地・アイデンティティ——)二〇〇四年、前掲『京城帝大英文科ネットワーケをめぐって——植民地期韓国文学における「英文学」と二重言語創作」などで、すでに「朝鮮」における英文学の受容について論じられている。

韓国においても김윤식『최재서의 『국민문학』과 사토 기요시 교수』 도서출판 연라(キム・ユンシク『崔掲瑞の『国民文学』と佐藤清教授』図書出版ヨルラク、二〇〇九年)などがある。また、アイルランド文学の受容については金牡蘭の研究(「我々」のアイルランド劇——一九二〇・三〇年代朝鮮と日本におけるアイルランド劇の移動)、筑波大学文化批評研究会編『翻訳』の圏域(二〇〇六年など)があり、鈴木暁世『越境する想像力 日本近代文学とアイルランド』(大阪大学出版会、二〇一四年)とともに参照されたい。なお今後の参考のために、巻末に『京城帝大国大英文文会会報』の目次を列挙した。撮影された誌面が東京経済大学のレポジトリを通して閲覧できる。

(参考編一)『韓国におけるモダン文化研究』主要文献(単行本および図録)

- 김진송『서울에 만스흠을 허가라』현실문화연구, 1999
- 金振松『ソウルにダンスホールを』(川村湊監訳、法政大学出版局、二〇〇五年、原著一九九九年)
- 권보드래『연애의 시대』현실문화연구, 2003
- クォン・ボドゥレ『恋愛の時代』現実文化研究、二〇〇三年)
- 서울역사박물관『근대대중예술 소리와 영상』서울역사박물관, 2003

(ソウル歴史博物館『近代大衆芸術 音と映像』ソウル歴史博物館、二〇〇三年)

- 신명직『모던빛이, 京城을 거닐다』현실문화연구, 2003
- 申明直『幻想と絶望』(岸井紀子・古田富建訳、東洋経済、二〇〇五年、原著二〇〇三年)
- 최정환『근대의 책읽기』푸른역사, 2003
- 김정일『여성의 근대』근대의 여성』푸른역사, 2004
- 김영인『여성의 근대』근대의 여성』푸른역사, 2004
- 김·키윤이『女性の近代、近代の女性』プルンヨクサ、二〇〇四年)
- 노형석『모던의 유혹』모던의 유혹』생각의나무, 2004
- 노·히ョンсок『모던의誘惑』모던의源』센가게ナム、二〇〇四年)
- 부산근대역사관『광고 그리고 인형』부산근대역사관, 2004
- 釜山近代歴史館『広告そして日常』釜山近代歴史館、二〇〇四年)
- 연세대학교『국학연구원』연세의 식민지시대와 인형생활』혜안, 2004
- 延世大学国学研究院『日帝の植民地支配と日常生活』へ안、二〇〇四年)
- 소래섭『에로 그로 년젠스』살림, 2005
- (ソ・レソプ)『에로·그로·난센스』살림, 二〇〇五年)
- 연구공간수유터머근대매체연구팀『新女性 매체로 본 여성 풍속사』한레신문사, 2005
- (研究空間スユノモ)『新女性メディアにみる女性風俗史』ハンギョレ新聞社、二〇〇五年)
- 조이담/박태원『구보씨와 더불어 정성을 가다』바람글루, 2005
- (チヨ・イダム/パク・テウオン)『仇甫氏と一緒に京城を行く』パラムグ드ゥ、二〇〇五年)

- 공제옥 / 정근식 《식민지의 일상 지배와 균열》 문화과학사, 2006  
(ヨン・ジェオク / チョン・グンシク 『植民地の日常 支配と亀裂』 文化科学社, 二〇〇六年)
- 신기옥 / 마이클 로빈슨 공역, 도면희 옮김 《한국의 식민지 근대성》 삼인, 2006  
(Gi-Wook Shin and Michael Robinson, Eds. Colonial Modernity in Korea. Harvard University Press, 1999. 韓国語版)
- 강영삼의 《일제 시기 근대적 일상과 식민지 문화》 이화여자대학교출판부, 2008  
(カン・ヨン삼ム他 『日帝時期の近代的日常と植民地文化』 梨花女子大学出版部, 二〇〇八年)
- 단국대학교 동양학연구소 《모던라이프 2.30년대 일상문화》 민속원, 2008  
(檀国大学東洋学研究所 『モダンライフ・オンパレード 2.30年代日常文化』 民俗院, 二〇〇八年)
- 단국대학교 동양학연구소 《근대 한국의 일상생활과 미디어》 민속원, 2008  
(檀国大学東洋学研究所 『近代韓国の日常生活とメディア』 民俗院, 二〇〇八年)
- 박상하 《경성상계》 생각의나무, 2008  
(パク・サンハ 『京城商界』 センガゲナム, 二〇〇八年)
- 김백영 《지배와 공간 식민지도시 경성과 계곡 일본》 문화과지성사, 2009  
(キム・ベキョン 『支配と空間 植民地都市京城と帝國日本』 文学と知性社, 二〇〇九年)
- 김주진 《신여성, 근대의 과잉》 소명출판, 2009  
(キム・スジン 『新女性, 近代の過剰』 ソミョン出版, 二〇〇九年)
- 오해진 《1930년대 한국 추리소설 연구》 어문학, 2009  
(オ・ヘジン 『一九三〇年代韓國推理小説研究』 語文学社, 二〇〇九年)
- 최병택 / 예지숙 《경성리포트》 시공사, 2009  
(チエ・ビョンテク / イエ・ジスク 『京城リポート』 シゴン社, 二〇〇九年)
- 김남석 《1930년대 조선의 대중극단들》 푸른사상, 2010  
(キム・ナムソク 『一九三〇年代朝鮮の大衆劇団』 プルンササン, 二〇一〇年)
- 최정환 《조선의 사나이 거든, 풋볼을 차라》 푸른역사, 2010  
(チョン・ジョンファン 『朝鮮的男子ならサッカーボールを蹴れ』 プルンヨクサ, 二〇一〇年)
- 최정환 / 이영돈 / 손유경 / 박숙자 편저 《식민지 근대의 뜨거운 만화경》 삼천리 / 와 1930년대 문화정치》 성균관대학교출판부, 2010  
(チョン・ジョンファン / イ・ギョン돈 / ソン・우ギョン / 박・숙치야 編著 『植民地近代の熱い万華鏡 『三千里』 と一九三〇年代文化政治』 成均館大学出版部, 二〇一〇年)
- 김영연 연구회 《식민지 검열 제도 텍스트 실천》 소명출판, 2011  
(檢閲研究会 『植民地檢閲 制度, テクスト, 実践』 ミヨン出版, 二〇一一年)
- 정계침 문화관 《경성 1930 이방인의 순간 포착》 청계침문화관, 2011  
(淸溪川文化館 『京城 1930 異邦人のとらえた瞬間』 淸溪川文化館, 二〇一一年)
- 소래섭 《불온한 경성》 명랑하리 《웅진지식하우스》, 2011  
(ソ・レソプ 『不穏な京城は明朗であれ』 ウンジンチシクハウス, 二〇一一年)

年)

●장유정 《근대 대중가요의 매체와 문화》 소명출판, 2012

(チャン・ユジョン 『近代大衆歌謡のメディアと文化』ソミョン出版、二〇一二年)

●서지영 《정성의 모던걸》·소비·노동·젠더로 본 식민지 근대》아이엔, 2013

(ソ・ジヨン 『京城のモダンガール 消費・労働・ジェンダーにみる植民地近代』ヨイヨン、二〇一三年)

●전우형 《식민지 조선의 영화소설》 소명출판, 2014

(チヨン・ウヒョン 『植民地朝鮮の映画小説』ソミョン出版、二〇一四年)

●박원석 《정성 모던타임스》: 1920, 조선의 거리를 걷다》 문화동네, 2014  
(パク・ユンソク 『京城モダンタイムス 一九二〇 朝鮮の通りを歩く』ムンハクトンネ、二〇一四年)

(参考編二) 『京城帝大英文学会云報』(韓国ではソウル大学校中央図書館が現物を所蔵している。日本では、東京経済大学学術機関レポジトリ「桜井義之文庫」 <http://repository.kt.ac.jp/pspace/handle/1150/2907> から閲覧可能。)

●第一号(昭和四年二月二十五日発行)

目次

(著者名)

(頁数)

Jane Austen のクリムプス

寺井邦男

二

ステイヴンスの祈禱書

寺本喜一

六

お化け

崔載瑞

七

最初の月給

李鐘洙

八

雑感

増田功

八

教員感想

蔡官錫

九

研究室の事ども

林原生

一〇

Mr.Blunden から佐藤教授へ

学内動静及研究室のなか

一〇

会員名簿

会員名簿

一一

●第二号(昭和五年六月五日発行)

岩山勝

二

「テス」に現はれた自然に就いて

寺本喜一

七

Quaintness と "Vivid Obscurity"

諸留寛

一〇

J.Austen の自然描写に就いて

森永龍之彌

一一

J.Galsworthy の "The Fugitive"

金龍煥

一二

凡人の生活

大口義夫

一三

ET Cetera

ET Cetera

一五

A Letter from Mr. Blunden

英文学会例会記録

一五

英文学会例会記録

昭和五年度講義題目

一六

昭和五年度講義題目

昭和四年度卒業論文題目

一七

昭和四年度卒業論文題目

個人消息

一七

個人消息

新入会員

一七

新入会員

編集後記

一七

編集後記

●第三号(昭和五年二月一〇日発行)

表紙 W. Hazlitt

一

表紙 W. Hazlitt

The English Language in the Far East	Livesey Haworth	二	会員消息	一四
Shelley の Reminiscences	崔載瑞	四	受贈雜誌	一四
Individualist としての Whitman	玄永男	六	編集後記	一四
K. Mansfield の作品について	諸留寛	八		
J. Galsworthy の "The Silver Box"	森永龍之彌	九	●第五号 (昭和六年六月二〇日発行)	
Nature Lyric 小考	杉本長夫	一一	表紙: William Morris's Stained Glass	一
Hood への Lamb	寺本喜一	一二	Irving in Shakespeare	二
Book Review		一四	詩の限界	三
学内動静		一五	Milton の simile	六
会員消息		一六	Herford の Wordsworth	七
雑録		一六	Tennyson の In Memoriam	九
編集後記		一六	新刊紹介	一〇
			新着図書 (II)	一〇
●第四号 (昭和六年三月五日発行)			学内動静	一一
表紙 Spenser's "The Shepherd's Calendar"		一	会員消息と通信	一一
Youth and the Classics.	R. H. Blyth	二	編集後記	一三
Bacon の Essays に就いて	山本智道	四		一三
"Birds, Beasts and Flowers" 覚書	寺本喜一	六	●第六号 (昭和六年十一月二〇日発行)	
Racine の観た Milton	西川融	一〇	表紙: Frontispiece of <i>The Song of Love</i> by W. H. Davies	一
新刊紹介		一一	Colloquial English	二
学内動静		一一	Arthur Symons	五
昭和五年度卒業論文題目		一二	ハートの「騎士伝奇論」	七
昭和六年度講義題目		一二	Granville Barker の近著	一〇
新着図書		一二	新著紹介—佐藤教授の新著	一二

新着図書Ⅲ

学内動静

Notes

会員消息

会員名簿

編集後記

表紙 From Caxton's *Mirror of the World*

J. B. Priestley の小説

Colloquial English (2)

Francis Thompson の自然詩

Wuthering Heights 雑感

新刊紹介

ゲーテ研究—文学研究(第一輯)—邦訳「ユリシース」

新着図書

学内消息

受贈図書

会員動静

編集後記

一

二

五

六

九

一一

一一

一二

一五

一五

一五

●第七号 (昭和七年三月一〇日発行)

表紙 From the Caedmon Poems

J. B. Priestley の小説

Aldous Huxley の詩集

Prometheus 雑考

Cranford にこころ

新刊紹介

Beddoes — 現実主義 — Coleridge — 現代英米文学

新着図書Ⅳ

昭和六年度卒業論文題目

昭和七年度講義題目

学内動静

受贈図書

会員消息

編集後記

一三

一四

一五

一五

一六

一六

一

二

六

一〇

一一

一三

一四

一六

一六

一六

一六

一七

一七

一七

●第九号 (昭和七年二月一〇日発行)

表紙 Title-page to the 1st edition of Robinson Crusoe.

独逸に於けるロビンソン・クルーソー物語 田中梅吉

ONeil の一考察 船津重輝

ONeil Mourning Becomes Electra に就て 戒能通忠

随感漫録 西川融

新刊紹介 杉本・西川

新着図書

学内消息

受贈図書

会員動静

一

二

五

六

九

一一

一一

一二

一五

一五

一五

●第八号 (昭和七年六月一〇日発行)

編集後記

一八

文学の保全

崔載瑞

一九

●第一〇号 (昭和八年三月一〇日発行)

表紙: Mr. Shaw wrestles with temptation

新刊紹介

二一

Adison の想像論

学内消息

二二

批評

受贈図書

二三

Conrad, Aiken 論考

会員動靜

二四

新刊紹介

編集後記

二五

卒業論文題目

●第一二号 (昭和八年十一月一〇日発行)  
表紙: From C. Middleton's translation of Evarad  
*Digby's De Arts Narranti, 1595.*

二六

昭和八年度講義題目

Esperlezen の新文法書

二七

学内消息

詩に於ける Imagery の意義

二八

新購入図書

Lawrence の最後の詩集

二九

受贈図書

新刊紹介

三〇

会員動靜

学内消息

三一

編集後記

受贈図書

三二

●第一一号 (昭和八年六月一日発行)

巻頭言

会員動靜

三三

英国の唱歌

編集後記

三四

Shelley と理想美

●第一三号 (昭和九年三月一日発行)

三五

Sheridan の comedies についで

表紙絵: From Coleridge's *The Ancient Mariner*

三六

Moral Realist としての George Eliot.

英国の唱歌 (承前)

三七

Eiton の研究方法に就て

ウインダム・ルイス論

三八

Byron の手紙

Lamb のエッセイ

三九

西川融

一六

西川融

二二

中島文雄

一

府中敏

二

小山政憲

六一

洪鳳珍

一三

Sigma

一五

西川融

一六

Sigma

一六

寺本喜一

一六

杉本長夫

一四

崔載瑞

九

寺本喜一

一七

崔載瑞

一七

中島文雄

一七

崔載瑞

一七

中島文雄

二

崔載瑞

六

西川融

二二

新刊紹介			
学内消息		T.S.	一五
卒業生論文題目			一五
会員動静			一六
会員名簿			一六
受贈調書			一六
編集後記			一七
●第一四号 (昭和九年五月五日発行)			
表紙口絵 Dickens and Disraeli	寺井邦男		一
デイキンズを如何に見る (一)	岩山勝		二
「暫光」に就いて	諸留寛		八
<i>The Needle-Watcher</i>	西川融		一三
English Idioms	大口義夫		一八
QUAKE IMPEDIT	金業		二二
欽定聖書訳に現はれたる go の用法に就いて			二三
新刊紹介	梶原俊		二六
英語教授に就いて	諸橋哲夫		二七
小河君の思出			二八
昭和九年講義題目			二八
学内動静及会員消息			二九

編集後記

二九

●第一五号 (昭和九年七月五日発行)

表紙口絵 "The Importance of Being Earnest" の舞台面			
Great-Great-Grandmother's Wedding Dress	P. L. Haworth		二
シエイクスピアの現代訳	F. N.		五
Wordsworth の "The Immortal Ode"	金海均		六
Webster の "The White Devil"	船津重輝		九
"King Lear" の価値	金尹錫		一一
蠹魚のあゝ			一三
"Winner Take Nothing"	李皓根		一三
雑録			一六

\*本稿は JSPS 科研費 (26370430) の助成による研究成果の一部である。また、内容については、公益財団法人日韓文化交流基金による訪韓フェローシップの報告書である (一九三〇年代の東アジア地域間における文化の交渉と翻訳―モダン都市東京・ソウルと文芸―) (『訪韓学術研究者論文集』第一三巻、二〇二三年三月) 中の全五節のうち、一〜四節を元にして、あらたに書き加えたものである。

(九州大学大学院比較社会文化研究院准教授)